

鍵あるいは錠の文化史的研究のために・序論

—テキストとフィールドに見るその象徴性—

加藤 秀雄

目 次

はじめに

1、先行研究の整理と課題

2、テキストから

(1) 鍵と主婦

(2) 鍵と権力

3、フィールドから

(1) 宮座におけるオカゲサマの象徴性

(2) 鍵と錠による願掛け

4、象徴性の由来

(1) 施錠する主体

(2) 対象に働きかける鍵と錠の機能

おわりに

はじめに

現代社会を生きる私達にとって、およそ「鍵」というものと無縁であるという人はほとんどいないだろう。家の鍵をはじめとし、車の鍵、倉庫の鍵などの所謂カギの形をしたものは勿論、駅の改札を通る際の定期券やネット

ワークにアクセスする際のパスワードなども広義の意味では鍵の一種であると言える。私達は様々な鍵によって、ある空間を閉鎖したり、閉鎖された空間の境界を越えたりしながら生活を送っている。

この「閉鎖」は「施錠」と言い換えることができるが、現代社会におけるそれは排他性によって「私<の>~」、或いは「私達<の>~」を他者の侵入から守るという「所有」の概念と密接に結びついたものであると言えるだろう。私達は鍵をかけることによって見知らぬ他者から自らの所有する財産や土地を守っているが、このような「施錠」は歴史的に見てどのような文脈から立ち現れてきた現象なのだろうか。そして、鍵の機能とは、ただそのような「私<の>」、 「私達<の>」所有物を他者から排他的に守るという、それだけのものに収斂されるものなのだろうか。

このことについて議論するためには、基礎的な作業として鍵を巡る文化史的な検証が要請されてくるだろう。そこでまず鍵について先行する研究を整理、参照した上でその課題を浮き彫りにしていきたい。

1、先行研究の整理と課題

『日本民俗大辞典』には「鍵」の項目が設けられており、野堀正雄による説明がなされている。ここでは簡単に、我が国における鍵の起源や形態、使用の実例などが紹介されており、「鍵には実用的な側面以外に、力や権威の象徴、お守りとしての呪術的側面も合わせ持っている。」として、その象徴的な意味への言及がなされている。しかし、具体的な研究が行われている著作や論文が無い為か、参考文献は一冊も挙げられていない。このことからわかるように、「鍵」というトピックは従来の民俗学的研究において注目されるものでなかったと言える。

そこで、他の人文科学における「鍵」に関する研究に目を向けてみると、その数も決して多いものとは言えないことがわかった。唯一、このテーマを文化論的な側面から研究しているドイツ文学者の浜本隆志は次のように言う。

(鍵と錠が)現代の社会との関連から重要性を増しているにも関わらず、日本において鍵や錠を文化論の視点から研究対象にする人はきわめてまれである。国会図書館の目録で調べても、鍵や錠にかんする和書は、純粹に技術関係のものを除くと、筆者の知るかぎり『鍵のかたち・錠のふしぎ』(アルシーブ社編、INAX)というエッセイ集と、本書(『鍵穴から見たヨーロッパ』)の前身である『鍵の文化誌』(関西大学経済・政治研究所)が世に出たと、1995年に出版された赤松征夫著『鍵と錠の世界』(彰国社)しか見当たらない。ただし同書は鍵と錠の歴史に論及されているがほとんど技術関係を中心にした内容である。

[浜本 1996: 5-6]

これらのうち、『鍵のかたち・錠のふしぎ』には「近代を解く・鍵」(高山宏)、「日本の建築と錠」(高橋康夫)、「目にみえぬ鍵」(谷口英久)など示唆的な視点をもった論考が多く見受けられるが、学術的に体系だった報告は浜本のものを除くと管見の範囲に上らなかつた。

しかし、浜本による鍵の文化史的研究は、西欧社会におけるそれを限定的に対象としたものであり、『鍵穴から見たヨーロッパ』のエピローグで「ヨーロッパの鍵と錠を考察することによって、逆に日本的思考方法も見えてくるのであるが、本書がヨーロッパの過去の鍵文化を理解するという意味だけでなく、日本の現在の鍵文化を把握し、さらに将来の展望をはかるためのささやかな参考資料となれば望外の喜びである。」[浜本 1996: 193]と結んでいるように、現代社会及び、我が国における鍵の文化論的な分析は今後の課題として残されている。

そこで、ひとまず本稿では野堀が言う所の鍵の象徴的な側面に絞って文献史料¹や民俗誌などを参照しながらその性格をより具体的な形で見ていき、この試みをもって今後の総論的な研究を行う際の一助としたい。

2、テキストから

(1) 鍵と主婦

恐らく、我が国における文献史料で最初に鍵に関する記述が登場するのは、『日本書紀』における天智三年（664年）十二月甲戌条であろうⁱⁱ。以下にそれを引用する。

十二月、(中略) 粟太郡人 - 磐城村主 - 殷之新婦床席頭端、一宿之間、稻生而穂、其且垂穎而熟、明日之夜、更生一穂、新婦出庭、兩箇鑰匙自天落前、婦取而與殷、殷得始富。

(十二月～粟田郡の人、磐城村主殷 [おおし] の新婦の寝床の端に一晩で稲が生え、穂がついた。翌朝には、穂が垂れるほど熟れていた。翌晩には更にもう一つの穂が生えてきた。新婦が庭に出ると、二本の鍵 [鑰匙] が天から目の前に落ちてきた。新婦はそれを拾い、夫の殷に渡した。それからというもの殷は富を得始めた。)

『日本書紀』 卷二十七 「天智紀」

この記述からわかることは、『日本書紀』が編纂されていた当時から鍵が富を象徴する存在として認識されていたという点である。ここでは、殷が新婦からカギを渡されることで稲穂への所有権を確かなものにしたと見るのが自然だろう。しかし、この記述においてさらに重要な点は、「新婦」が「天から与えられた鍵」を持って来ることで夫が「富」を得ることになるという物語構造にあるⁱⁱⁱ。一見、このコンテキストにおける物語要素間には何の因果関係もないように感じられるが^{iv}、これが意味するところを考える上で『万葉集』の1738番に収められている次の和歌は非常に示唆的である。

詠上総末珠名娘子一首（上総の末の珠名娘子を詠んだ歌）

水長鳥 安房尔継有 梓弓 末乃珠名者 胸別之 廣吾妹 腰細之 須軽娘子之

其姿之 端正尔 如花 咲而立者 玉梓乃 道<往>人者 已行 道者不去而 不
召尔 門至奴 指並 隣之君者 <預> 己妻離而 不乞尔 鑑左倍奉……

（〔しなが鳥・枕詞〕安房の国の〔梓弓・枕詞〕「末の珠名」は胸の
大きなほっそりした蜂腰のような娘で、その容姿はとても端正であっ
た。彼女が家の前で花のように微笑んで立っていると〔玉梓の・枕詞〕
道ゆく人は自分の行く先すら忘れて、呼ばれてもいないのに門前まで
来てしまう。隣家の主などは妻と別れ話もしていないのに自分の家の
鍵〔鑑〕さえあげてしまうありさまであった……）

『万葉集』 卷第九 「雑歌」

この和歌の後半部に注目してみると、妻との別れ話もしないままに隣家の
主人が美貌の珠名に鍵を渡してしまっているという記述がある。その解釈と
して、妻として迎え入れられる女性の立場や権利は家の鍵によって保証され
ており、これを男性が渡すことには、求婚行為として象徴的な意味があると
見ることが出来るだろう。洋の東西が異なるため性急に同一視して取り扱う
わけにはいかないが、これと関連する興味深いものとして浜本によって引用
されているJ・グリムのヨーロッパにおける「主婦権」についての以下のよ
うな指摘がある。

鍵は主婦の権力のシンボルである。花嫁は結婚の祝日に鍵を飾りつけ
て現れる。それは腰帯につるしたが、主婦はその権利を放棄して離婚す
る際には、鍵を外し、夫に鍵を返さなければならなかった。

〔浜本 1996 : 82〕

さて、これまで見てきた二つの史料とグリム（浜本）の指摘から、主婦と
鍵の象徴的な関係性が見えてきた。先ほどの「新婦」が「鍵」によって「富」
をもたらすという『日本書紀』の一見、不可解な記述は、『万葉集』の和歌
から、「主婦権」を保証するという鍵の性格が見出されたことによって説明
がつく。即ち、家政における「富」は主婦の「鍵」の力によって秩序づけら

れるということが『日本書紀』の記述におけるコンテクストレベルで示されているのである。これを記号論的に表すと以下になるだろう。

秩序／無秩序

文化／自然

夫 / 新婦 (鍵を得ることで秩序の側に回収、変換されるトリックスターの存在)

鍵 / 寝床に成りつづける稲穂

天 / 地上

富 / 秩序づけられていない富

これは、山口昌男が『文化と両義性』において行っているテキスト分析の方法論を参照した上で、筆者が独自に行った分析であるが、これ以外に「女性」、「鍵」、「福分に恵まれる男」などのモチーフが登場するような類話^v、神話等を今後、収集、整理していくことでより精度の高いモデルを提示したいと考えている。

(2) 鍵と権力

鍵の象徴性についての別の側面が見出される史料として、三善為康によって永久四年(1116年)に編纂された詩文、文書集である『朝野群載』に収められた「國務條々事、受領印鑑事」と、同時期に成立した『今昔物語集』の巻二十五、「平将門発謀反被誅語第一」をここでは取り上げたい。まず『朝野群載』だが、内容は次のようなものである。

一 受領印鑑事(新任国司の印と鍵の受け渡しについて)

擇定吉日。可領印鑑。但領印鑑之日。即令前司奉行任符。乃後領之。又著館日儀式。前司差官人。分付印鑑。其儀前司差次官以下目以上一兩人。令資印鑑。令參新司館。即官人就座之後。鑑取書生。以御鑑置新司前。其詞云御鑑進ル。

(吉日を選んで印と鍵の受け渡しの儀式は行われる。鍵と印の受け渡しが行われる日に、前任の国司は辞令をうける。この時、次の国司の前に鍵と印が持ってこられる。官人が着席したのち、鍵取(鍵の管理者)と書生(下級事務官)が鍵を新任国司の前に置き、新しい国司は、「御鑑(おんやく)たてまつる」と言う。)

『朝野群載』 卷二十二 「諸国雑事上」

ここでは、国司の交代が鍵の受け渡しの儀礼によって成立していることが伺えるが、この鍵は他の法令^{vi}を見る限り、諸国の不動倉(飢饉に備えて穀物が備蓄される官営の倉庫)の鍵であると考えられる。口上で「御鑑^{vii}たてまつる」と新国司が述べることによって儀式が完了しているところを見ると、いかに国司の行政権というものが鍵によって象徴されていたかが見えてくるだろう。このような鍵の性格をあらわすものとして、次の『今昔物語集』に収められている承平・天慶の乱(平将門の乱、935年に勃発)に関する説話を合わせて見ると、更に鍵と行政権の関係について理解が深まると思われるので以下に引用する。

(将門の協力者である興世王に「一国を奪っただけでもその罪は大きいいだから、この際、坂東も押領して、状況を見るべきでしょう。」と言われた際の将門の反応と、その後の展開。)

将門答云、「我が思フ所只此レ也。(中略)先ヅ諸国の印鑑を奪ヒ取テ、受領ヲ京二追上ム。」ト議シ畢テ、多ノ軍ヲ卒シテ、下野国二渡ル。既ニ国庁二着テ、其ノ儀式ヲ張ル。

其時二国ノ司藤原弘雅・前司大中臣ノ宗行等館に有テ、兼テ国ヲ奪ムトスル気色ヲ見テ、先ヅ将門ヲ拜シテ、即チ印鑑ヲ捧テ地ニ跪テ、逃ヌ。

(将門は「私が思うところもただそれだけである。(中略)まず、諸国の印と鍵を奪い取って、受領を京都に追い払う。」と答え、多くの軍を率い、下野国に渡っていった。そして国庁に着くと、印と鍵を受ける儀式を行なった。

このとき、国司・藤原弘雅、前国司・大中臣宗行らが館にいた。国を奪おうとする気配を見ると、まず将門を拝んで地にひざまずき印と鍵を捧げて逃げ出してしまった。

『今昔物語集』 卷二十五 「平将門発謀反被誅語第一」

ここでは、藤原弘雅と大中臣宗之が、降参の証として印と鍵を平将門に渡しているという場面が描かれているが、戦争に負けた側が行政権における象徴的な意味を持つ「鍵」を勝者に譲渡するという事例は、ヨーロッパの城塞都市においても見られる。例えば、1625年にオランダの都市、ブレダにおいてスペイン軍が戦勝したことを記念して描かれたベラスケスの絵画『槍』には、敗者のナッサウが勝者であるスピノラに城門の鍵を譲渡している場面があり、ちょうど将門と弘雅らの関係を彷彿とさせる。ⁱⁱⁱ

ここまでみてきたいくつかのテキストの事例から、鍵にはただ施錠されたものを開錠するという機能的側面だけではなく、それが登場してくる歴史的に初期の段階から象徴的側面があったことがみえてきた。しかし、このような鍵の象徴性は何も過去の史料の中だけに存在するものではない。次節では、それを現在という視点から民俗誌的な資料を参照しながらみていきたい。

3、フィールドから

ここでは、『日本民俗大辞典』で野堀が言うところの、鍵の「力や権威の象徴」としての性格について、中村羊一郎によって報告がされている静岡県三ヶ日町津ヶ崎白山神社における宮座組織^{iv}の例祭(十月十三日)とニンノーマツリ(人皇=仁皇祭り、二月二十一日)の二つの年中行事でオカゲサマと呼ばれる鍵がどのように扱われているかという事例からみていく。そして、もう一つの側面である鍵の「呪術的」な性格について、奈良県生駒聖天の絵馬、宮城県大師山大楽寺のカギ供養、神奈川県江ノ島・恋人の丘における願掛けの事例を参照しながらみていく。

(1) 宮座における鍵の象徴性

静岡県三ヶ日町津ヶ崎の白山神社における宮座では、以下の年中行事においてオカゲサマと呼ばれる神社のカギが重要な意味付けを与えられている。

① 例祭

従来、白山神社の例祭は十月十三日に行われていたが、現在はそれに近い日曜日に行われる。これを取り仕切るのは、村人の中の最年長者から一年ごとに順繰りで就任する頭屋的な「禰宜番」と呼ばれる役職であるが、この禰宜番はオカゲサマと呼ばれる神社の鍵を保管しており、例祭の際には鍵を白扇に載せて捧持し、先導者が塩を撒きながら清めた道を自宅から徒歩で神社に向かう。組の人々は塩撒きをはじめとして櫃をかついだり太鼓をうつ役で行列に参加する。鳥居前で氏子総代らの一行と出会い、揃って石段を昇って拝殿に着座すると神官がこの鍵を用いて本殿の扉をあける。この後、型どおりの神事と参拝者の祓い、直会などが行われ禰宜番の家で用意した黄粉ぼた餅が配られる。

② ニンノーマツリ（人皇、仁皇祭）

仁皇祭は旧暦では一月二十一日に、現在では二月二十一日に行われている。当日は型通りの神事のあと、禰宜番の交代が行われる。一年間を無事務めた禰宜番の家に神官・氏子総代・禰宜番の組の人々および下禰宜（次に禰宜番を務める人物で、禰宜番の仕事を見ながら実務などを見習う。）とその組の人々が集まる。床の間を背にして左手に旧禰宜番、右手に新禰宜番が座る。中央にはオカゲサマを入れた櫃、禰宜番の氏名を記した帳面を入れた箱が安置されている。ここで皆の立ち会いのもと執行される手続きの中にオカゲサマの受け渡しがあるが、旧禰宜番が拍手をうってオカゲサマを拝礼し白い手袋をした後、それが入った櫃を手で支えながら扇子の上に乗せて新禰宜番の前に立つ。旧禰宜番も同じようにそれを拝礼し、開いた扇子でその櫃を受け取る。ここで改めて旧禰宜は櫃に向かって拝礼する。

この二つの年中行事から指摘できることとして、オカゲサマの性格がただ神社の鍵という以上に禰宜番の権威を保証するという、前節でみたような主婦権や行政権と鍵の関係のような象徴性を強く持っている点が挙げられる。これは、神社の鍵を持つということが、その宮座における祭祀権を有すると捉えられていることに由来すると考えられるが、ニンノーマツリにおける鍵の受け渡しの儀礼が、『朝野群載』に見られる国司の交替の際のそれと酷似している点などは興味深い。

この白山神社のものに限らず全国各地に神社の鍵を持つことがその権威を保証しているという事例は多いが、鍵を有する家ないし人は、カギトリ、カギヌシ、カギアズカリなどと呼ばれ、神社創建に携わった本家筋の家が代々、世襲的にそれを継承している場合もある。(中村によると静岡県裾野市須山、同県井川などに見られる。)

私達は鍵を財産を守るためのツールであると捉えがちであるが、神社に施錠を行うこと、開錠することには財産守るというよりも、ハレとケの境界を越境するという性格の方が強い。それを行使する権利をオカゲサマが象徴しているのであるが、このことは祭祀、引いては村における権力の所在を明確にするものである。そこにあるのは私財の所有権を排他的に主張するというよりも、共同体における秩序を維持するという「開かれた施錠」とでもいうべきものであろう。

(2) 鍵、錠^xによる願掛け

鍵は施錠、開錠する「対象」との親和性から、錠はその「閉鎖するという機能」から類感呪術的な願掛けによく用いられている。ここでは以下の三つの事例を挙げておく。

① 奈良県生駒聖天と絵馬

奈良県生駒山の宝山寺には、歓喜天(通称、聖天さん)と呼ばれるインドの魔神(ビナヤカ)を祭る聖天堂がある。岩井宏実によれば、この聖天さんは気性の激しい神であるとの信仰から、これに誓って女・酒・煙草・

博打をやめようとする風がきわめて濃厚であり、「女」という字や盃、キセル、サイコロ、花札の絵に錠をした「錠物」^{xii}と呼ばれる絵馬が奉納されている。 [岩井 1974 : 112-113]

② 宮城県大師山法楽寺の「願掛けカギ供養」^{xiii}

2005年から宮城県大師山法楽寺ではインターネットを利用したカギ供養というサービスを行っている。カギ供養は事故で廃車になった車の鍵や、新築、引っ越し行方際に以前住んでいた家の鍵などを真言宗の修法で供養し、新車の安全や新居での幸福を祈願するというものである。これは、以下のような手続きによってなされる。

メールフォームから申し込み。→法楽寺に供養してもらいたい鍵を持ち込むか、郵送する（鍵を預けることに抵抗がある場合は写真でも可）。→修法による供養が行われる。→お札やお守り、修法の様子を写した写真が希望者には送付される。→依頼者の自由意思で供養料が決定され法楽寺の銀行口座に振り込まれる。

③ 神奈川県江ノ島・「恋人の丘（龍恋の鐘）」における錠のおまじない

江ノ島神社では龍神と天女（弁財天）の恋の縁起に因んだ「恋人の丘」というスポットがあり、龍恋の鐘をカップルが二人で鳴らした後、近くのフェンスに二人の名前を書いた錠をしておくことで永遠に幸せになれるというおまじないがある。いつ頃から始まったか定かでないが恐らくごく最近のものだろう。^{xiii}

同様の風習は、宮城県東白杵郡美郷町の「恋人の丘」や北海道石狩厚田公園展望台でも見られる。また、千葉県香取市の聖フランシスコ教会では「愛鍵式（あいかぎしき）」^{xiv}というものを行っており、希望するカップルから錠を「愛が成就するまで」預かり、鍵は二人にそれぞれ持ってもらうという。

これら三つの事例のうち、①と③は「閉鎖」という錠の持つ性格が、不可視の事象（二人の愛、飲酒、女遊び、賭博、喫煙など）に対して適用された例であると見ることができるだろう。これは、飲酒、女遊び、賭博、喫煙を

「しないという心」、二人の「愛し合う心」に施錠をしているのであり、「施錠した時の気持ち」が外部に出てしまわないようにしていると言える。

②の場合は①、③と異なり、施錠する対象のメタファーとしての「鍵」という性格が色濃く表れているものであると言える。家、或いは車のメタファーとしての鍵が供養されることで、鍵そのものではなく家や車を供養したことになるという感覚^{xv}は、(1) で見たような神社祭祀の監督権そのものをオカゲサマが象徴しているという事例と同一のものとして見ることが出来る。即ち、鍵がただ施錠されたものを開くためのツールであるという以上に、施錠された対象と不可分の関係を有していると見做す人々の心象が見えてくるのである。

ここで、野堀の言を借りてカギの象徴性を分類すると以下ようになる。

A 施錠した対象と同一視される「鍵、錠」。これは、施錠した対象への権利、権威を保証するものとして機能することがある。事例としては(1) や(2) の②が当てはまる。

B 呪術的にその「閉鎖する(開放する)」^{xvi}という性格が用いられる「鍵、錠」。事例としては(2) の①・③が当てはまる。

このA、Bの分類は、あくまでも鍵と錠の象徴的な性格を強調するために便宜上分けたものである。ここでは一応、その性格が時と場合、語り、思考によって流動的に揺れ動くようなものであるという点を注意しておきたい。

例えば恋人同士が別れたくなくて、おまじないに使用した錠を破壊するというようなことがあったとする。その場合これは「二人の関係」という「対象」と錠が同一視されている、Aに分類されるような鍵と錠の象徴的性格が顕在化していると言える。どのような存在もそうだが、その意味付けは普遍的にそれに落とし込まれているようなものではなく、社会的、時間的な文脈に依存しているのである。「車に鍵をかける」という意味付け以上のものを有していなかったはずの鍵が、事故で車が廃車になった途端に車そのものを表象するといった(2)・②にあるような事例は、存在の意味付けにおける社会的、時間的文脈への依存性が端的にあらわれていると言うことができるのではないだろうか。

4、象徴性の由来

ここまでテキストとフィールドにおける史料、資料から鍵と錠の扱われ方を概観し、その象徴性について見てきた。だが、その象徴性が一体どのような人間の思考を媒介として表出するのかという基本的な問題がまだ残されたままである。素描ではあるが、ここで施錠する「主体」とそれが為される「対象」に注目し、そこから遡及的に論じていきたい。

(1) 施錠する主体

不動倉に収められた穀物、封建的イエ空間、神が鎮座する神殿、マイカー、マイホーム、お互いの愛情、禁止したい己の悪癖…、これらは全て施錠される「対象」であり、対象の存在しない施錠は原理的にあり得ない。

即ち、施錠という行為の「主体」が、その対象と何かしらの関係性を有し、意味付けを行っている限りにおいて施錠は為されるのであるが、この意味付けの論理にこそ鍵と錠の象徴性を担保する原理が含まれていると考えられる。ここでは施錠する「主体」と、施錠される「対象」との関係について、倫理学者の大庭健が行っている「所有」に関する議論が参考になると思われるので以下に引用する。

非神話化された理解によれば、「所有」とは、主体たる人格と物件の関係である。ある人格Pがある物件xを任意に用益・処分することを、他の人々が正当なこととして承認している、ということがすなわちPが当該の物件を所有しているということなのである。しかしながら、こうした「物件」と「人格」という区別は、単なる「物体」と「心」あるものという、極めて近代的な区別を前提としている。そうだとすれば、右[ママ]のような所有の概念は、神話が生きられていた前近代にあっては極めて異様であったはずである。 [大庭 2004 : 143]

この大庭の議論には施錠する主体の所在を考える上での重要なヒントが隠されている。私達は施錠について「所有物（物件、対象）」と施錠を行う「個人（人格）」の関係性を前提にして考えるが、それは「非神話化された」、「近代的な」区別によるものであり、施錠における物件（対象）と主体の関係には、それだけに還元されないようなオルタナティブがありうる。

ここで施錠する主体を「個人（人格）」というものから引き離して考える契機を持つ事例として、3節で見たオカゲサマについて考えてみよう。神社の鍵の管理者である禰宜番は、大庭の所有論に照らし合わせると、個人的な私有権が認められている故にそれを有しているわけではないということがわかる。もし、禰宜番がオカゲサマを個人の意志で任意に処分するようなことがあれば、確実に共同体の他のメンバーから糾弾されることになるだろう。つまり禰宜番はオカゲサマを「自己所有（私有）」しているわけではないのであり、施錠の行使権を有する主体は特定的人格ではないのである。ここで「公」という領域が俄かに見えてくるが、この公の論理（規範）は暗黙知として共同体の成員全体に共有されているものであり、その内部における秩序を基礎づけているものである。この論理に基づいて施錠の象徴性は担保され、儀礼的な場でそれを駆動させるのである。

（2）対象に働きかける鍵と錠の機能

鍵と錠の象徴性が、施錠する主体の論理、規範に依っているということについて上で見てきたが、最後にもう一つ、対象に働きかける鍵と錠の「機能」がその象徴性の要因となっているという点について触れておきたい。

そもそも「鍵をかける」とはどういうことなのだろうか。ここでは、鍵をかけられた対象が鍵をかけられる前とで、どのような違いがあるかに注目する必要があるだろう。前節の（2）の①・③で見られた事例では、願掛けを行う人々が、自分（達）の心象に変化の可能性があることを潜在的に意識し、それに対する危機感を有しているということが見てとれる。（そうでなければ、そもそも願掛けなど行わない。）これは、願掛けを行っている時点では「自分の悪癖を正したい。」「私達は愛し合っている」と思っている、その

心象が、時間の流れがもたらす不測の事態（他律的要因）によって変化、或いは消失してしまう恐れがあるからであるが、その可能性は錠の機能に由来する象徴的な性格と超越的存在との契約によって積極的に排除される。

この錠の性格を「固定化」とここでは呼びたい。ある物件（対象）の変化、消失の可能性は、先に述べたように、現在の視点から見た場合の未来における不測の事態（他律的要因）によって生起するが、施錠は「それが行われる瞬間の主体と対象の二者間の（変化させたくない）関係性」を固定化する。固定化された主体と対象の関係性は、鍵の持ち主（即ち「主体」）の開錠の「意思」によってのみ、その変化の可能性が限定させているが、この「固定化」と「変化可能性の限定化」という錠と鍵の機能がそのまま象徴性と結びつけられて人々に扱われるのである。

ところで、この二つの機能は、主体と対象の関係性を固定化するために、人間の無意識を明るみにしてしまうという性格を有している。あやふやなものであったはずの危ういその関係が施錠という行為によって具象化してしまうのである。この意味で施錠という行為は「隠蔽」というより、強力な「主張」になるという皮肉な結果をまねくことがある^{xvii}。このような鍵と錠の転倒した性格について、谷崎潤一郎の小説、『鍵』における次の一節から見てみよう。

今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這射ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもなしのことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、ただ不用意にあの鍵をあんな風に落しておいたとは考えられない。夫は実に用心深い人なのだから。（中略）生来疑い深い夫はわざわざあれ（註・自分と妻の性生活に対する不満を綴った日記が入った筆筒）に鍵をかけたりその鍵を隠したりしなければ、安心がなかったのであるらしい。…その夫が今日その鍵をあんな所に落して行ったのはなぜであろうか。何か心境の変化が起って、私に日記を読ませる必要を生じたのであろうか。

[谷崎 1968 : 13-14]

ここでは妻が、普段夫が用心深く隠しているはずの鍵を見つけたことで、夫は何か自分に主張したいことがあるのではないかと勘ぐっている場面が描かれている。これは鍵の持つ「隠蔽」という仮の性格が「主張」という秘められた性格に取ってかわった瞬間であると捉えることができるだろう。「鍵」が妻という「施錠した瞬間」における他者にもたらされることで、夫と日記の関係性だけに固定化された危うい心の状態が強力に主張されるのである。この鍵というツールの持つ「隠蔽による主張」というパラドキシカルな性格が、この小説全体の官能性をより豊かなものにしている。

おわりに

本稿では、いくつかのテキストとフィールドデータを参照しながら、その象徴性について具体的にみていき、それがどのような人間の思考に基づいてもたらされているのかということについて論じていった。この作業によって鍵と錠が、ただの道具であるというだけでなく、非常に象徴的な性質を持ったものであるということが見えてきただろう。だが、今回の試みは、あくまでも基礎的なものに過ぎず、それを元に論じた議論も素描でしかない。今後、鍵と錠を巡る完成度の高い文化論的な研究を行うためには、より広い視野をもった上で、更に新たな方法論を模索していく必要があるだろう。

そもそも、筆者が鍵に興味をもった理由は、なぜ人は鍵をかけなくてはならないのだろうかという素朴な疑問によってであり、それが、公や私、所有、境界、近代といった諸々の問題になにかしら新しい視点を提供してくれるのではないかと期待した為である。だが、それらに対してアプローチする前段階として、一般に定義される所の理論（ここでは辞典項目にあるようなもの、呪術的、象徴的側面）を具体的に検証する必要が出てきた。

今回は、象徴性以外のトピックと鍵文化の関係についてほとんど触れることができなかったが、このテーマは現代における民俗学的研究の地平の一端を開く良い「鍵」であると筆者は感じている。今後、本稿を手始めとして様々な角度から取り組んでいきたい。

註

- i 『世界の鍵と錠』において加藤順一が「鍵」に関する記述が見られる我が国の文献史料をまとめているが、本稿でもそれを参照した。
- ii ただしここで登場する鍵は現在、私達が想像するような鍵ではないと思われる。『日本書紀』や『万葉集』が編纂された当時、日本国内に鍵が存在していたことは、野々上遺跡出土の「海老錠」（飛鳥時代、650年ごろのものとして推定される。〔資料4〕参照。）などから明らかであるが、これは櫃を施錠するために用いられたものであり、輸入品であると思われる。国産の鍵についての記述が最初に見られるのは、803年成立の「延暦交替式」においてであるが、これも飢饉に備えた倉（不動倉）の鍵なので、家屋の鍵ではない。そもそも当時の市井の人々にどこまで鍵というものが身近であったかは不明瞭な点が多い。（恐らく、ほとんど無縁であっただろう。）ここからは推論の域を出ないが、この説話が我が国固有のものではなく、鍵文化が既にある程度身近であった渡来系の人々によってもたらされたという可能性を考慮に入れる必要があるかもしれない。
- iii 結婚を契機として新婦のおかげで夫が福分に恵まれるという説話は、「炭焼小五郎」など口承文芸における長者譚に多くみられるモチーフではあるが、この『日本書紀』における記述をこれと同系統のものとして位置づけてよいかどうかは、更に他の文献にあたった上で検証する必要があり、また本稿の趣旨とずれてくるので今後の課題としておきたい。
- iv 加藤もこれを「荒唐無稽なお話」と言っている。〔里文出版 2001：81〕
- v 鍵ではないが、我が国における主婦権の象徴として有名な「しゃもじ」が登場する昔話に「尻鳴りしゃもじ」などがある。天（氏神）からの贈り物であるしゃもじによって主人公が幸福になる点などは、書紀の記述と照らしあわせて考えてみても興味深い。
- vi 「延暦交替式」、「延喜典鑰式」など。
- vii 「御鑑」を「おんやく」と読むが、もともと「鑑」に「やく」という読みは無い。当て字であると考えるべきだろう。
- viii 〔資料1〕参照。
- ix 宮座は近畿地方に多くみられる神社祭詞の組織であるが、類似するものは他の地域にも見られる。中村はその「地域的な特質」を明らかにするために「近畿地方における宮座として報告されている事例を念頭において（中略）、近畿とは距離を隔てた地域における「宮座的」な祭祀の特徴を明らかにしたい。〔中村 1994：99〕とし、暫定的に静岡（遠江）における宮座的な祭祀組織を呼称名が異なるものも含めて「宮座」と呼んでいる。
- x 鍵と錠の違いについてであるが、錠は南京錠のような「鍵穴」があるものを指す。鍵はそれを開くためのものである。日本語においては、この両者をどちらも鍵と呼ぶことがあるが、これ以降は区別して考えておきたい。

- xi [資料2] 参照。
- xii [<http://kagi-kuyou.net/>]
- xiii [資料3] 参照。
- xiv [<http://www.st-francisco.net/koibitosiki.html>] 参照。尚、Web上の資料は全て2007年11月5日時点のものである。
- xv このような願掛け、供養における人と物、或いは神の関係については、[田中 2006] が詳しい。
- xvi これまで見てきたものは、錠の「閉鎖する」という性格を象徴的に用いてきた事例であるが、鍵の「開放する」という性格が用いられる場合も勿論ある。例えばファッションブランドなどが、「閉ざされた心の錠を開ける鍵」、「幸運の扉を開く鍵」などと銘打って鍵の形をしたアクセサリーを商品化している事例などが挙げられるだろう。
- xvii 皮肉というより、むしろ「主張」という性格の方が施錠においてはより根源的なものなのかもしれない。

主要参考文献

赤松征夫

1995 『鍵と錠の世界』 彰国社

アルシーブ社編

1997 『鍵の形・錠の不思議』 INAX出版

岩井宏実

1974 『ものと人間の文化史12・絵馬』 法政大学出版

2007 『絵馬に願いを』 二玄社

大庭健

2004 『所有という神話』 岩波書店

大庭健・鷺田清一編

2000 『所有のエチカ』 ナカニシヤ出版

黒板勝美編

1938 「朝野群載」『国史大系』第29上 吉川弘文館

小峯和明校註

1994 「今昔物語集4」『新日本古典文学大系(36)』 岩波書店

坂本太郎ほか

1995 『日本書紀(5)』 岩波書店

佐竹昭弘ほか校註

1999 「萬葉集1」『新日本古典文学大系(1)』岩波書店

里文出版編

2001 『世界の鍵と錠』里文出版

田中宣一

2006 『供養のこころと願掛けのかたち』小学館

谷崎潤一郎

1968 『鍵・瘋癲老人日記』新潮社

中村羊一郎

1994 「遠江における宮座とその特徴」『静岡県史研究』第十号 pp.99-138 静岡県教育委員会

西弥生

2003 「中世興福寺における別当就任儀礼—「印鑑用意條々」を通して」『国立歴史民俗博物館
研究報告』第100号 pp.41-71 国立歴史民俗博物館

浜本隆志

1995 『鍵の文化誌』『研究双書』 pp.1-185 関西大学経済・政治研究所

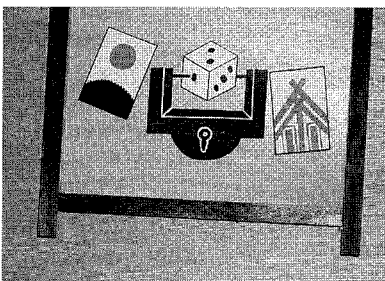
1996 『鍵穴から見たヨーロッパ』中央公論社

山口昌男

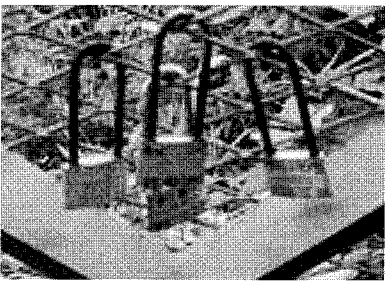
2000 『文化と両義性』岩波書店



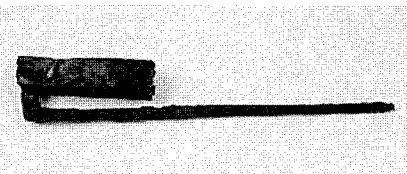
資料1：ベラスケス「槍」、中央の二人がスピノラとナッサウで鍵の譲渡が行われている。



資料2：生駒聖天の「錠物」の絵馬



資料3：江ノ島、「恋人の丘」のフェンスにかけられた錠



資料4：「海老錠」（大宰府史跡月山東地区出土、11～12世紀）